

「無事」という境地

—山本有三「無事の人」をめぐって—

会期：令和3年3月13日(土)～令和3年9月5日(日)

「無事の人」は、昭和24（1949）年4月に雑誌「新潮」で発表された作品です。当時の山本有三は、参議院議員の任期中にあたり、文化委員長として祝日法の制定や、国立国語研究所の設置に尽力する等、華々しく活躍していました。一方で、作家としての活動からは昭和18年発表の「米百俵」以来、遠ざかる日々が続いていました。有りと親交の深かった独文学者の高橋健二によれば、昭和21年の初夏、有りは急に「創作だ、仕事をするんだ、と興奮して、ほかのことを投げ出して、書斎にとじこもって」（*1）高橋を驚かせたと言います。しかし執筆は思うように捗らず、足かけ4年の歳月を経てようやく書き上げたのが、中編小説「無事の人」でした。

戦後、永井荷風や志賀直哉、谷崎潤一郎ら文壇の大家たちが、戦中の沈黙を破りふたたび作品を発表し始める中、有りの「無事の人」も「老大家

のカム・バック現象」（*2）を彩るものとして、大きな期待のもと迎えられました。

しかし、ともすれば教訓めいた人情話とも映る「無事の人」は、戦後の新しい文学創出を目指す文壇の動向からは外れた作品と見なされ、芳しい評価を得ることはありませんでした。それでも有りは、「無事の人」を改訂したうえで、その後もたびたび作品集に収録しています。また、昭和47年に出版された自選集に『無事』という題名を冠していることから、作品への愛着の強さをうかがうことができるでしょう。



です。もとは大工であった〈為さん〉は、あんなとなった後、禅寺の住職から「無事の人」になれ、という言葉をかけられたことから「無事あんのん、無事息災」を心掛け、〈為さん〉なりの「無事」を追求しようとしませんが、懸命に働こうとすればするほど、「さわり」が起り、「無事」の境地から遠ざかってしまいます。

「毎日、働いてたら、無事ってことにいかねえもんでしょかねえ。」

〈為さん〉の素朴な言葉は、〈宇多〉に強い印象を残し、敗戦後の日本が安定を得るために何をなすべきかという問題へと思考を誘っていきます。

「無事」とは禅語であり、作中には『臨濟録』から「無事これ貴人。たゞ造作することなかれ。」という一節が引用されていることから、禅の思想の反映を見ることができます。また同時に、壮年期の有りが随筆「すわり」（大正14年）などで表した、絶えず活動することで安定を得ようとする思想とのつながりを確認できる箇所もあり、老境に至った有りが禅の思想に接近しつつも、人生の上で一貫して追い求め続けてきた境地を表した作品と捉えることができるでしょう。

本展では、有りが「無事の人」において表した「無事」という境地を、いくつかの随筆作品とともに探ることで、改めて作品の魅力に注目します。

（文芸企画員・芸芸員 三浦穂高）

*1：高橋健二「編集後記」（『山本有三全集』第十二巻 新潮社 昭和52年5月）

*2：高山毅「実感の喪失」（『世界文化』世界文化社 昭和24年5月）

「無事」と「無事の人」について

小川太龍（花園大学准教授）

ある年末の茶会に出席した時、「無事」と墨書された床の間の掛軸が目に入りました。年の瀬にはこの字が好まれるそうで、茶会の亭主（＝主催者）は、「毎年この軸のように平穩無事だと思いますが、なかなかそうは行きません」と解説していました。

このように「無事」とは、何事もない平穩な状態を指す語として一般に用いられます。では、無事の対義語とはなんでしょうか。「事が無いこと」の反対は「事が有ること」ですので、「有事」となります。

有事とは「通常ではない、非常の状態」を指し、この語から多く戦争を想起します——現在のコロナ禍も有事と表現されています——。その意味では山本有三の「無事の人」は、戦時中という「有事」を舞台としており、題の「無事」と対になっていると言えるでしょう。しかしこの作品は、一般の用法とは異なる禅の「無事」が主題となっています。

有三は後に削除した第九章に、「無事は貴人——無事であることこそが悟りし人——」という禅語を引いています。これは臨済宗の宗祖である唐代の禅僧、臨済義玄（？—八六六／八六七）の言葉です。

そこで拙文では、臨済の語を集めた『臨済録』を中心に、禅における「無事」について考えます。これが作品「無事の人」の理解の一助となれば幸いです。なお「無事の人」とは、無事の体現者を指す語

です。

まず臨済は無事について、求めることと対比して次のように言います。「求めるならば苦しむことになる。無事であるのが一番だ（你若し求むること有らば皆な苦し。無事なるに如かず）」。これは裏を返せば、無事とは「求めないこと」だということですから「求めない」とはどういうことでしょうか？

物欲や名譽欲、様々な欲望を求めない。いわゆる煩悩を離れることを思い浮かべ、またその実践として、禅僧の質素な修行生活を想像するかも知れません。外へ求めず内面を見るところででしょうか。

残念ながらそれだけでは足りません。臨済は外に求めることを否定したうえで、以下のように言います。

禅師たちよ、ワシが「外に真理を求めてはならない」と言うのと、それが理解できず、それならば内だ、と、じつと動かず坐禅をして、それがこれまでの祖師たちが行ってきた仏法だと心得る。大間違いだ。（大徳、山僧「外に法無し」と説かば、学人会せずして、便即ち裏に解を作し、便即ち壁に倚りて坐し、舌上齟を柱え、湛然として不動、此を取りて祖門の仏法と為是す。大いに錯れり。）

なんと坐禅修行も内に求めることとして否定します。また他にも次のような表現が見えます。

たとえ一人で山に籠もり、一日一食、坐禅三昧で横にならず、日に六度の礼拝を欠かさずとも、これはすべて地獄行きの業作りだ。（乃至孤峰に独宿し、一食卯齋し、長坐して臥さず、六時行道するも、皆な是れ業を造る底の人なり。）

「禅宗は坐禅をし、修行が厳しい」という話を耳にしたことがある方も多いと思います。しかし臨済は、坐禅も含む仏道修行をことごとく退けるのです※。これは悟りを求める、修行が、無事の求めないという立場の対極に当たるためです。つまり臨済は、外にも内にも「どこにもなにも求めない」ことが無事であると言うのです。

さらに理解を深めるために、禅における「無事」の対義語を確認しましょう。一般に用いる「無事」の対義語は「有事」でした。一方、禅における「無事」の対義語としては、「多事」を挙げることができます。「多事」とは「事が多いこと」、すなわち「くどくどしい余計ごと」を指します。ですから、これの反対の無事とは「くどくどしい余計ごとがない」ということになり、言葉を換えれば「ありのままに端的（＝簡明）」ということになります。

この無事と多事を用いた例が、臨済より数世代前の司空本淨（六六七—七六一）という禅僧の以下の語に見えます。これは、修行者が悟りを求める様を批判的に述べた一節です。

真理は本来修行によらないのに禅僧たちはあえて修行し、真理は本来手を加える必要がないのにあえて手を加え、真理は本来無事であるのにあえて多事を生じている。(道は本と無修なるに大徳^{だいとく}強^{かう}いて修す。道は本と無作なるに大徳^{だいとく}強^{かう}いて作す。道は本と無事なるに強^{かう}いて多事を生ず。)(『景德^{けいとう}傳^{でん}灯^{とう}録^{ろく}』卷五)

臨済と同じく修行の不要を説き、無事は本来「ありのままに端的」であるのに、くだくだしき余計ごとを生じて、真理から離れてしまっていると示します。ここで重要なのは本来的に無事であるということです。すなわち無事とは、意図してそうなるのではなく、元々そうであるということです。そして私たちは、本来的に無事であるのに、それが信じられず多事となっていると指摘します。

では、どのように日々を過ごせば、本来的に無事である状態なのでしょう。これについて臨済は具体的に次のように言います。

仏法は造作を用いることを必要としない。ただありのまま、無事に「くだくだと求めること無くズバリ端的に」、糞・小便をたれ、着物を着て飯を喰らい、眠くなったら横になる。これを愚か者は笑うが、智者は分かってくれるだろう。(仏法は功を用うる処無し。祇^た是^ただ平常^{びやうじやう}無事^{むじ}、屙^わ屎^し送^{そう}尿^{によう}、著^{じやう}衣^い喫^{きつ}飯^{はん}、困^{こん}じ来^きたらば即^{すなわ}ち臥^{ふし}す。愚人^{ふじん}は我^{われ}を笑うも、智^ちは乃^{すなわ}ち焉^{これ}を知る。)

もともと何も手を加える必要のない無事である以上、ありのままに日々を過ごすことを示します。日常性を全肯定しているとも言えるでしょう。ただし、ありのままと言っても好き勝手ではありません。それでは欲望を求め、ことになってしまいます。

以上の「無事」については、禅においても様々な論争があります。ともあれ、臨済を始めとする唐代の禅僧たちの言う「無事」とは、なにも求めず、くだくだしい余計ごとのない、ありのままで端的な様を指しました。またそれを、もともとそうである本来的な悟りの境地だと説くのでした。そしてこの無事を体現する悟りし者こそが、「無事の人」ということになるのです。

最後に作品「無事の人」について「あえて多事を生じてみます。この作品は太平洋戦争という「有事」を舞台に、盲目の按摩師、為さんの身の上話を中心に展開しています。為さんは「無事あんのん、無事息災、事がねえのが何よりでござんす」と、一般的な「無事」を目指しており、必ずしも禅のそれとは一致しません。しかしこの作品は、「多事」を逡巡する為さんや主人公の、ありのままの心境と日常を中心に描くことで、禅の「無事」を巡る一連の説示を表現しているとも読み取ることができます。そのように見ればこの作品は、一般的な無事と禅の無事を巧みに織り込んでいると言えるでしょう。縷々、無事について申し述べて参りましたが、中国清代の禅僧は昔の人の言葉として、次のように注意を促しています。

少しでも「無事」と言えば、たちまち「多事」となる。(纏^{むす}に無事を説かば、早^す是^こに多事となれり。)(『宗宝^{そうほう}道^{どう}独^{どく}禅^{ぜん}師^し語^ご録^{ろく}』卷二)

※ただし実際の禅は、坐禅修行を行い現在に至ります。当時の禅僧たちも経典を学び、修行をしていました。また後代には、厳しい坐禅修行の規定も生まれます。これらと臨済たちの説法との間には、複雑な思想的変遷と議論があります。

参考文献

- 入矢義高 『臨済録』、岩波文庫、一九八九年。
小川 隆 『語録の思想史——中国禅の研究』、岩波書店、二〇一一年。
入矢義高 『増補 求道と悦楽——中国の禅と詩』、岩波現代文庫、二〇一二年。
齋藤智寛、衣川賢次 『六祖壇経・臨済録』(新国訳大蔵経 中国撰述部)、大蔵出版、二〇一九年。

小川太龍 (おがわ たいりゅう)

1978年兵庫県生まれ。専門は禅学、中国仏教。主な論文に「『黄檗度母話』の形成と受容」(単著)、『禅学研究』97、2019年3月)、『臘八摂心の形成——流行と定着——』(『印度学仏教学研究』第68巻第1号2019年12月)などがある。

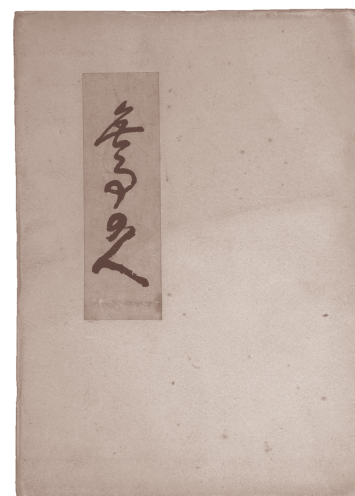


コラム

鈴木大拙と「無事の人」

生成りの白地に泰然と墨書された『無事の人』の題字は、仏教学者かつ僧侶である鈴木大拙（本名：貞太郎 1870-1966）の手跡です。鈴木は、青年期に鎌倉・円覚寺にて数年にわたり参禅し、臨済宗の禅僧・今北洪川（1816-1892）、釈宗演（1859-1919）に師事しています。「大拙」の居士号を受けた後は、明治30（1897）年に渡米し、出版社で東洋学関係の書籍出版に携わることから、英語で禅についての著作をあらわしました。明治42年に帰国した後は、学習院や真宗大谷大学の教授職等を歴任しながら、日本と欧米を講演で行き来しつつ、生涯にわたり仏教の研究と普及に尽力しました。

山本有三は、自作の挿絵や装幀にも細かく気を配り、画壇の大家に依頼するなどのこだわりを見せた作家として知られています。大拙と有三の交流を示す資料は残されていませんが、禅語「無事」という言葉が大きな意味を持つ「無事の人」の題字を、禅の大家・大拙に依頼したことは、実に有三らしいこだわりと言うことができるでしょう。



『無事の人』
(新潮社 昭和24年)

年間パスポートのご紹介

三鷹市山本有三記念館では、発行日から1年間、何度でも入館できる「年間パスポート」を受付にて販売しています。年2回の企画展に加え、子ども向けの「おはなし会」や「アフタヌーン・ミニコンサート」など、様々な定期イベントにご活用いただけます。ぜひお買い求めください。

【価 格】1,000円（税込）

【有効期限】発行日から1年間

【購入場所】山本有三記念館1階受付

※ご購入者のみ有効です。他人に譲渡または貸与することはできません。



三鷹市山本有三記念館
年間パスポート

ガイド
ボランティア

土・日・祝日の午後1時から4時まで解説を行っています。
事前申込は不要ですので、お気軽に声をおかけください。

※新型コロナウイルス感染症対策のため、「ガイドボランティアによる案内サービス」を当面の間休止中です。
再開時期につきましては決定次第ホームページ等でお知らせいたします。

編集・発行

三鷹市山本有三記念館

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀2-12-27
TEL 0422-42-6233

<http://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

入館料：300円（20名以上の団体200円）

・中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、
「東京・ミュージアムぐるっとパス2021」利用者は無料

アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分、

JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口（公園口）より徒歩20分